PRESS RELEASE

〈報道関係各位〉

YURINDO

2022 年 12 月 5 日

株式会社有隣堂

図書館総合展 ONLINE_Plus 開催レポート

11月28日オンラインフォーラム「本を読まない人に振り向いてもらうには」

登壇者：ポプラ社 池田紀子氏、有隣堂　松信健太郎　　進行：文化通信社 星野渉氏

株式会社有隣堂（本社：神奈川県横浜市 代表取締役社長：松信 健太郎）は、11月28日(月)、図書館総合展2022 ONLINE_Plus (主催：カルチャージャパン)の連動企画として、「本を読まない人に振り向いてもらうには ～コンテンツとファン作りの世界～」と題したオンラインフォーラムをYouTubeライブ配信にて開催しました。本に携わる関係者共通の課題である読者を増やすためのアプローチについて、株式会社ポプラ社 取締役 池田紀子氏、松信健太郎が登壇、株式会社文化通信社 取締役社長 星野渉氏の進行のもと、様々な議論が交わされました。100名を超える視聴者の約7割が図書館や学校関係者となった今回のフォーラムの模様をお伝えします。

池田紀子氏　　松信健太郎　　星野　渉氏

◆オンラインフォーラム概要

「本を読まない人に振り向いてもらうには
～コンテンツとファン作りの世界～」

・開催日時：11 月 28 日(月)15:00～16:30

・パネリスト：

●**池田紀子氏**　株式会社ポプラ社
取締役・生産管理本部長・こども事業・SDG s 担当

●**松信健太郎**　株式会社有隣堂 代表取締役社長

・モデレーター：

●**星野　渉氏**　株式会社文化通信社
取締役社長執行役員

・主催：株式会社有隣堂

・アーカイブ動画視聴 URL：
https://www.youtube.com/watch?v=20GN_urjOa0

◆開催レポート

フォーラムの前半は、パネリストの松信、池田氏の順に各社の取組みをプレゼンテーションし、後半は、星野氏もまじえて視聴者からの事前質問を取り上げながらのパネルディスカッションとなりました。

・ 有隣堂の取り組み紹介 「本を読まない人に振り向いてもらうには」

日本の国際競争力と学生・児童の学力低下を結びつけた社会問題を提示した松信は、「子どもたちの明るい未来へ不可欠の要素としての「本」と、祖業である本屋を大事にしたい」と語り、３つの方向性を定めた取り組みを紹介しました。

１．「本屋を楽しい場所に変えていこう」

本を買う目的以外の来店動機をつくるためのイベントや企画を紹介しました。また、会社を好きになってもらう取り組みとして、2020 年 6 月から開設した YouTube チャンネル「有隣堂しか知らない世界」にも触れ、YouTube のコメント欄がファンのコミュニティ　になっていると話しました。

２．「読書の楽しみを伝えていこう」

独自の取り組みとして、ビブリオバトルと、慶応義塾大学 SFC 井庭崇研究室と共同開発した『Life with Reading 読書の秘訣カード』『創造性を育む 本の楽しみかたカード』を使った学校図書館等でのワークショップ支援活動が紹介されました。

３．「本のタッチポイントを増やしていこう」

本のある空間をプロデュースする選書事業では、「マンション 1F の共用部に本棚を設置することで、マンションに住む子供たちが毎日の登下校に本をチラ見するようになった。この本との接点があるとないでは大きな違いがある。このような取り組みは、図書館との連携も可能性があると思う」と語りました。

・ ポプラ社の取り組み紹介「子どもと＜本＞をつなぐ」

本との接点をたくさん作ること、それが夢中になれるものであることを目指すポプラ社の思いを語る池田氏は、今回２つの出会いにしぼって取り組みを紹介しました。

１．「学校での出会い」

子どもの学びを取り巻く環境が急激に変化し本との接点も時代とともに変わるなか、出版社も変わらなければならないとして、2022 年から提供を開始した＜本と学びのプラットフォーム＞『MottoSokka!』を介した２つのサービス「Yomokka!」「Sagasokka!」を紹介。電子書籍読み放題サービス「Yomokka!」には、「子供たちが毎日使いたくなるような、本に触れてみたくなるような機能がある。感想の記録・共有機能では、子どもたちのコメントが日々増えていく様子が見え、友達を通じて本が身近になる。私も大好きな画面」と話しました。こうした電子書籍での体験が紙の読書につながっていることも言及しました。

２．「コンテンツの出会い」

「本が苦手な子どもでも、読書体験の扉を開いてくれる」と語る人気シリーズ『かいけつゾロリ』は 35 周年。「読む」の可能性を広げる初の公式アプリ「バーチャルゾロリ城」では、「読書 RPG のような新しい読書体験『リーディングクエスト』や、原作者の原ゆたか先生のコーナーもあり、作者を身近に感じられる。好きな作品の作者との出会いはとても大切」と語りました。
さらに、展覧会や図書館での謎解きイベントなどの体験を通して本との接点をつくる取り組みのほか、家庭・幼稚園・保育園での本との出会いが増えることを願って生まれた活動「のびのび読み」を紹介。「まずは、本って楽しいな、と思ってもらいたい。親も子も肩の力を抜いて楽しんでもらいたい」と語りました。

２者の事例紹介をうけて星野氏は、「知識・情報の多様性は大事。本はそのなかのひとつ。現代は、あえて言わないと本の大切さが伝わらない。数千年の間に蓄積された知識が文字と記号で丁寧に説明されているメディアはなかなかない。本のおもしろさ、有用性を伝えていくことが大事と感じた」とまとめました。
また、文化通信社が本を贈る習慣を普及・定着させるために 2020 年に開始したギフトブックキャンペーンについて紹介しました。「2021 年『ほんのきもち』、2022 年は『先輩の本棚』と題し、これから社会に出る若い人に向けて著名人が贈りたい本を紹介している本で、彼らの熱量が伝わる内容となっている。熱量をもって人に本をすすめるのは強制にならない。本が人に伝わり、出会いを作っていく取り組み。図書館、書店の両方で好評」と話しました。

・ パネルディスカッション

■図書館や書店に来ない人にどうやってアプローチする？

松信　「書店の話でいえば、コミュニケーションの場として再定義しなければならない。おもしろい場に変えていくこと。新しい情報に接することができる場所、広く役割を定義づけするように取り組んでいる」

池田氏「ポプラ社も注力している領域。書店での謎解きイベントでは、あえて書店員とコミュニケーションを取れるようにした。負担もあるが、お互いコミュニケーションが取れたら、『特別な場所』になる」

星野氏「そこがおもしろいと思わせるのは『人』の力。なかで働く人が働きやすく変えていくことも必要では」

■若い人、特に Z 世代に向けて読書をすすめるには？

池田氏「小さい頃に本を読んだ経験がないと、大人になってからでは難しい、戻ってこられない、というのが大前提。だからこそ、子どものときの本の入口が重要。Z 世代には、TikTok を活用している。ブックインフルエンサーとの連携が読書のきっかけになっている。世代に合わせたきっかけ作りをすること」

松信　「小さいときになるべく多く本と接しておくこと。そのうえで、身近に本を置くこと。なにかきっかけがあれば本を手に取るはず。そのために、なるべくたくさんの接点・きっかけを作ること」

星野氏「子どものときの読書環境をつくることが重要というのは皆共通している。であれば、親への啓もうも重要かもしれない」

■電子書籍についてはどう考える？

松信　「社会のデジタル化は人類の進化なので止めることはできない。止めるべきではない。それが書店経営に影響を与えるのであれば、経営努力をしなければならない」

池田氏「電子書籍が増えていくことは、読む機会が増えること。紙でも電子でも、読む人が増えることがよいこと」

星野氏「紙もデジタルもあって、選択していく。移行することは不可避なものと受け入れて、図書館も電子化をどう進めるか、課題もまだまだあるのでそれをどう克服するかを考えなければならない」

・　まとめのメッセージ

池田氏「本に触れて読まないと本が好きにならないと思っている。まずは本に触れる機会を多くすること、手に取った本が夢中になれるものになるように頑張っていきたい。本が大好きで本の力を強く信じている」

松信　「書店と図書館は、力を合わせて地域の知を支える両輪でなければならない。今までコミュニケーションが足りなかった。これをきっかけに、図書館と書店がもう少しコミュニケーションを取れるようになりたい」

星野氏「人と本が触れることは、本を書く人作る人にとってとても大事なことで、それを社会で実現してくれる学校や図書館は、本に携わるものたちの仲間であり、同志であると強く感じた。図書館、出版社、書店は、学校も含めておそらくもっといろいろな形で連携しあえる。このパネルディスカッションがその一助になれるとよい」

◆株式会社ポプラ社　公式ホームページ：https://www.poplar.co.jp/
◆株式会社文化通信社　公式ホームページ：https://www.bunkanews.jp/
◆株式会社有隣堂　公式ホームページ：https://www.yurindo.co.jp/storeguide/
◆図書館総合展　公式ホームページ：https://www.libraryfair.jp/